

二つの泥棒のお話

光野 朝風

津波と泥棒

とある海岸沿いの町に、一人の泥棒がいました。

泥棒はよく町に出て、商店で果物や品物を盗んだり、人のお金を取ったりしていました。

悪いことばかりする泥棒は人々から嫌われていました。

ですから、人目のつくところを歩けません。

誰かの目に留まると、「見ろ！泥棒がいたぞ！捕まえろ！」とみんなが泥棒を捕まえにくるからです。

泥棒はいつも人々の目を盗んでは悪いことをして、盗んだお金を他の町で使って遊んだりして自分だけいい思いをしていました。

町の人が困ろうと、悲しもうと、自分が楽しかったので気になりませんでした。

そんなある日、泥棒が丘の上で太陽の光を浴びながら寝転んでいました。

ふと海に目をやると、泥棒は異変に気がつきました。

なんと、水平線の方に大きな波が見えるのです。

泥棒は驚いて、思わず町に出て叫びました。

「大変だ！大きな津波が来るぞ！！みんな逃げろ！！」

みんな、泥棒が昼間にどうどうと現れたことをよく思いませんでした。

みんな、泥棒の言うことを疑います。

「どうせ、そうやってだましてお前はまた悪さをするのだろう」

みんな口々にそう言います。

それどころか、誰かが警察官を呼んできました。

警察官は悪い泥棒を捕まえようとします。

泥棒は必死に訴えます。

「本当だ！遠くの海から大きな津波が来るぞ！みんなあれに飲み込まれちゃう！」

それを聞いた警察官は言いました。

「お前の言うことは信じられん。人にもものを言う前に人に信用される行いをする事だな」

そう言って泥棒をお縄にかけようとしたが、泥棒は津波に飲み込まれたくないのでいちもくさんに逃げました。

丘の上まで一人で逃げてきた泥棒は大きな津波が町を飲み込んでぐちゃぐちゃにしていく様子をじっと眺めているしかありませんでした。

「だから俺の言ったとおりだったろ。俺のことを信用しないからあんなバカな目にあったんだ」

警官と泥棒のやりとりがあったしばらくあと、高台にいた住民は津波を見つけ、町の人々へ逃げるように伝えました。

多くの住民が波に飲み込まれました。

助かった町の人々は高台まで逃げてきました。

丘の上にいる泥棒を助かった警官が見つke、泥棒を見るなりいいました。

「どうしてお前が一番先に見つけたのだ」

さらに警官は言いました。

「お前が牧師だったらみんな信じてこんなにも多くの人死なずにすんだのに。お前の信用のなさがこれほどの死者を生んだのだ」

泥棒は警官の言葉を聞いてとても悲しくなりました。

確かに自分は人の物を盗む罪を犯し、人々に迷惑をかけ続けたけれど、一体どこに津波を知らせることへの罪があるというのだろう。

町が津波によってめちゃくちゃにされ、泥棒は町で盗むものもなくなり、自分の好き勝手に暮らせなくなってしまいました。

食料もお金もない泥棒はどうしようもなくなって、町の人々の避難所へとふらふらと行きました。

避難所では町の人々が協力し合って必死になって暮らしていました。

そこへ突然泥棒が現れて、みんな驚き、鋭い眼でにらみつけます。

避難所へ行っても泥棒は怪しまれ、誰も泥棒に助けの手を出そうともしませんでした。

「あいつは盗みをするから大事な物を見せちゃいけないよ」

「何をしでかすかわからない悪いあいつを早く追っ払おう」

周りからは泥棒を疑い、嫌い、追い出そうとする声しか聞こえてきませんでした。

避難所の人々は食べ物や生活の品々をお互いにやり取りしていますが泥棒のところへは一切回ってきません。

泥棒は次第に孤独になり、町の人に怒りと恨みを抱くようになりました。

(そもそも俺の言うことをちゃんと聞いていれば、もう少し逃げる準備ができたのに、せっかくの大事な情報さえも疑いやがって)

人々に無視し続けられる泥棒はだんだんと飢え、身なりもボロボロになってきてついに盗みを働きました。

人々は口々に泥棒を罵ります。

「それみろ！やつは盗んだぞ！だから信用できないと言ったんだ！」

「だから最初から追い出せと言ったんだ！泥棒はどこまでいっても泥棒だ！」

泥棒は追放され、行く当てもなく、ついに一人で食料もなく飢え死にしてしまいました。

おじぞうさんと泥棒

あるところに気弱な泥棒がいました。

その泥棒は泥棒なのですが、いつも気弱ゆえに行動がわかりやすく、盗むときはおどおどしてしまうので、他人にわかってしまい、いつも盗みを失敗してしまい、結局何も盗めないままでした。

情けないことに泥棒のくせに、いまだに人から何も盗んだことはありませんでした。

かといって村に戻り、真面目に仕事をしようにも、村の人々は泥棒だと知っているので、真面目に働くこともできません。

泥棒がどうやって生き延びているかという、いつも近くのおじぞうさんにお供えされるおにぎりやお団子などを食べて生き延びていました。

しかしそれだけではおなか減ったままです。

泥棒はおじぞうさんの側の木の下にへたり込んでおなかをさすると、おなかから大きな音がなります。

(腹減ったな・・・)

木の上には小鳥たちがピヨピヨと楽しそうにじゃれあっています。

今の泥棒には何もかもが食べ物に見えます。

思わず小鳥に手を伸ばしますが、届くはずもなく、あまりの空腹にがっくりと肩を落とします。

泥棒はおじぞうさんに近づく足音に気がつきました。

(お、もしかしたらお供え物かもしれない)

泥棒は期待しながら木陰から誰が来たのか足音の方を見ます。

足音はゆっくりゆっくりおじぞうさんに近づきます。

ようやく姿が見えると、おじぞうさんのそばにやってきたのは腰のまがったおばあさんでした。

おばあさんは背中の風呂敷を下ろし、包みを解いて、中からおにぎりを出しておじぞうさんに供えました。

そしておばあさんは手を叩いておじぞうさんをお願いします。

「どうか今日も一日幸せでありますように。村の人々も幸せでありますように。おじぞうさまどうかお願い申し上げます」

おばあさんは、へえへえと言いながら手を大事にすり合わせてお願いしています。

泥棒はその様子を見ながら早くおばあさんが行って欲しいと思っていました。

泥棒のおなかは鳴りっぱなしで、先ほどから生つばばかり飲み込んで、のどがゴクリと鳴るばかりです。

泥棒の頭の中はもうおにぎりのことばっかりです。

ようやくおばあさんの長い儀式のようなお願いが終わり、泥棒はおばあさんの姿が見えなくなったと同時ににおにぎりをおじぞうさんのところから盗んで木の下でむしゃむしゃと食べてしまいました。

「あー、おいしかったなあ。これで少しは動けるようになったぞ」

泥棒は今日こそは何か盗まないとずっとこの生活だと思って、村に盗みにでかけることにしました。

村へ行く途中、泥棒は道の真ん中におばあさんがへたり込んでいるのを見つけました。

泥棒は思わず木陰に隠れてしまいます。

木陰からそっと様子を伺うと、おばあさんの背中越しにおばあさんが必死に祈っている声が聞こえました。

「足をくじいてしもうた。おじぞうさま、どうか助けてくださいませ。わしはこのまま村に一人で帰れなくなってしもうた。どうかおじぞうさま、わしを村まで連れて行ってくださいませ」

おばあさんは必死に手をすり合わせながら祈っています。

泥棒は見捨てておくのもかわいそうになってきて、勇気を出して木陰から出ておばあさんを助けることにしました。

「おい、ばあさん。村まで背負って行ってやるから、ほら」

泥棒はそう言って、おばあさんを背負って村まで必死に歩いていきました。

おばあさんは背中と言います。

「ありがとうございます。ありがとうございます。こりゃあ、おじぞうさんがお前さんをよこしてくれたんじゃ。おじぞうさんがお前さんをよこしてくれたんじゃ。助かった。本当に助かった」

おばあさんは背中におぶられながら、何度も何度もお礼を言いました。

泥棒が、がんばっておばあさんを村まで背負って帰ると、おばあさんは村の人々に言いました。

「足をくじいて歩けなくなって、おじぞうさんに祈っていたとき助けてくれたんじゃ。あの人はおじぞうさんがつかわしてくれたんじゃ。あの人のおかげで助かったんじゃ」

おばあさんが、村の人々に言うと村の人々は今までの泥棒への目を変えました。

「お前は本当はいいやつなんだな」

「ちゃんと必死に人助けをするとは見直したぞ」

村の人々は、結局何も盗まれていないし、今回の人助けのこともあるので、今までのことは水

に流そうということになりました。

その夜、おばあさんを助けた元泥棒は村の人々から厚い歓迎を受けました。

たくさんの食べ物やお酒を村の人々と一緒に分かち合って食べました。

元泥棒は感激して目頭を厚くさせました。

肩を抱き、楽しみを分かち合い、笑いあう。

孤独ではちきれそうだった気持ちもあたたかなものに満たされていくのがわかりました。

元泥棒は思いました。

(この笑顔や幸福を人々から奪っちゃいけない。これからは大事な人々の笑顔を育てられる人になろう)

その瞳には、泥棒だったころの鋭く冷たい光は消え去り、あたたかなともし火がしっかりと宿っていました。